

短編シリーズ

おにゃのこのカケラ

vol.3



ゆきの

私が行きつけの美容室を出る頃には、もう辺りは薄暗くなっていた。

長い付き合いの担当美容師さんは、

「これぐらいの明るめのカラーのほうが、断然若々しく見えますよ！」

なんて言って、カラーリングの出来栄えに太鼓判を押してくれたけど、ちょっと赤みが強すぎたような...

『明日、高校卒業15年目のクラス会に行くんですよー。』なんて正直に言わなきゃよかった。チャンスとばかりに、いろんなコースを勧められて結構な出費になってしまったのだ。

年も年だけど、『こうした方が若く見えます』という言葉をさりげなく連発されるのにも、やや辟易。

ああ、でも...

美容室の帰り道って、やっぱり、気持ちいい。

新しい自分に生まれ変わる感覚は、女の子の特権かもしれない。

このドキドキが嬉しいうちは、いくつになっても「女の子」なんだと思う。

三十路過ぎてるけどね。

忙しさにかまけて美容室にもご無沙汰してたから、Y駅に降りたのも久しぶり。

横浜線は通勤には毎日使ってるけど、普段は素通りしてるから。

今、ホームに八王子行きの電車が入ってきた。私は、電車に乗り込むと、ドア近くに立った。

明日の夕方も、クラス会に行くために、この駅で降りる。

みんな、元気してるだろうか。江梨子も...来るのかな。

あの頃は毎日のように、彼女は、ベンチに座って私の部活が終わるのを待っていて...

思い出して、駅の階段前の広場に目をやると、15年前とまったく変わらずに、あの場所には青いベンチがあった。

目を凝らすと、誰かが、ベンチに座っているように見えた。

脳裏に、江梨子が私を見つけて笑顔で手を振っている映像が鮮明に浮かんだ。

あの場所に、江梨子がいる。青い、ベンチに座って。

「江梨子！」

気がつくと、私は彼女の名を叫び、電車から飛び出そうとしていた。

その時、無情にも鉄の扉は目の前で閉じ、電車はゆっくりと動き出してしまった。

あのベンチは、もう、見えなかった。

クラス会の日

今日は、これから、クラス会だ。

私は、横浜市内の病院に勤務する看護師の、高崎 史。

歴史の「史」、一文字で、「ふみ」と読む。

今は、ちょっと事情があって、2年前に相模原市内にある実家住まいに戻り、横浜線に揺られる毎日だ。

以前は、横浜に住んでいたんだけど、ちょっと、ね。実家も、横浜線も、悪くはないかな。

そして、私は今日は、自分の出身高校へ向かうために、東神奈川行きに乗った。

私にとっては、実に、8年ぶりのクラス会。

仕事の都合やら何やらで、ずっと欠席していたから、本当に久しぶり。

今回のクラス会は、卒業から15年の節目の年ということで、特別な企画らしい。

一次会は、高校3年当時の教室に集まって、ノンアルコールの立食パーティーだそうだ。

下戸の私は、お酒の席は得意ではないから、ちょっとありがたい企画だ。

十分足らずで、私を乗せた電車は、Y駅に着いた。

駅の改札を抜けると、右手に母校が見える。

少女の頃のような、ドキドキを感じながら、私は、かつての自分の教室へと向かった。

3年2組の教室のガラス戸には、『平成8年度卒業生・クラス会会場』と書かれた紙が貼ってあった。

私は、その扉を、思い切って開けた。中から元気な挨拶が飛び出してきた。

「おはようございまーす！」

「えっ？おは...よ。」

夕方だけど。朝の登校の再現か。

幹事の日下部さんと清水さんは、高校のときの制服を着ていた。

「うわーっ。なつかしー！」

「ふみちゃん、久々～。これつけてね！」

渡された名札をつけて、隣の机で会費を払った。

それから、何人かの旧友が私に声をかけてくれたけど、曖昧な受け答えしかできず、私の目は江梨子の姿ばかりを探していた。

教室がだいぶ賑やかになってきた頃、開始時刻ちょうどぐらいに、当時と変わらないロングヘア

とメガネの彼女が入ってきた。

15年ぶりに目にした江梨子は、凜とした美人になっていたが、随分と痩せていたのが気になった。

「江梨子！」

気がつくやうに、私は、大きな声を上げてしまっていた。

彼女の元に、小走りで近づいた。

「ふみ！ホントに、ふみ？」

私の名を呼ぶ唇は、微かに震えている。

「どうしたの？江梨子、私のこと、忘れちゃった？」

彼女は一瞬、瞳を大きく見開いて…。大粒の涙を、一滴、二滴、こぼした。

「ちょっと…！江梨子…。」

頬を伝っていく雫に魅せられて、私は、ぎゅっ、と、心臓をつかまれたような衝撃を覚えた。

「あ…あの！」

江梨子のそばに一步近づき、声をひそめた。

「外で、ふたりで、話そっか？」

彼女が、目を伏せて頷くのを確認した。

私たちは、手を繋いで、迷うことなくあの場所を目指した。

あの駅の、青い、ベンチ。

私たちは、ベンチに腰掛けた。

隣に江梨子が座っているのが、当たり前すぎて、15年前にタイムスリップしたかのような錯覚を覚える。

沈黙に、耐え切れなくなった私の方から、口火を切った。

「昨日、今ぐらいの時間に、さ。江梨子、ここに座ってた？」

「えっ？」

と、小さな声を上げた後、彼女は、ああ、と頷いて微笑んだ。

「買い物の帰りに、喉が渴いて…。数分、休憩したかも？」

どうして？と目で問うようにこちらを見つめる。

「昨日、美容院の帰りに、駅からベンチが見えてさ。絶対、江梨子だと思った！」

彼女は、おどけて、見られてた！と言って、ふたりに笑った。

ぬるい風がふわり、と吹いて、私たちの思い出をそっと運んできてくれた。

「昔は、いつもここで、私を待っていてくれたよね。なつかしい…。」

彼女の唇は、寂しく笑った。

「ふみは、吹奏楽部で…いつも、帰りが遅かったっけ…。」

「うん…。江梨子は…、家庭部だっけ？いつも、甘い匂いがしてた。」

「ああ、調理科学部。」

私たちの目は、あの頃の思い出の残像を追いかけていた。

ぼんやりと、視線を泳がせて、時折、楽しそうに、そして、悲しそうに。

「クッキーとか、ドーナッツとか、できたてのお菓子が江梨子のバッグからたくさん出てきてさ…。」

「あたし、ふみを餌付けしてたっけ？」

江梨子は可愛らしく、クスッ、と笑った。

「うん、されてた、されてた。美味しかったよ…。」

自販機で買ったミネラルウォーターを江梨子に手渡し、私は、肩で息を吐いてから、訊ねた。

「江梨子さあ、北海道で、薬剤師になって…で、結婚したんだよね？」

何度も目をやり確認したが、彼女の左手の薬指には、指輪はなかった。

「…うん、でも、もう、5年も前に離婚したの。」

「えっ…、ゴメン…。」

彼女は、空を仰いで、続けた。

「あたしの、元夫はね。」

「うん。」

「あの、お酒、入っちゃうと、さ、...あたしに手をあげたり、ね...。」

私は、彼女の細くなった指を強く握り締めていた。

「まあ、よくある話だろうけど...。」

「そっか...。」

どこか他人事のような口調で、彼女は、決して楽しくはない思い出話を語った。

「決定的になったのは、あの人のこぶしが目に当たっちゃった時かな。」

「えっ！目、って！」

「うん、網膜剥離を起こして。その後すぐ周りからの勧めもあって、別れる事に、なった...。」

網膜剥離を起こすほどの暴力が、どれほどのものか想像できた私は、正直、ぞっとした。

「目！後遺症とか、大丈夫なの？」

「あは、さすがは看護師さんだね、ふみは。右目の視野は...今は、三分の一、くらいかな。」

「江梨子...。」

「あっ！大丈夫！ちゃんと、見えてるし。」

健気な彼女を見ていると、自分が、泣きたくなった。

心の中では、涙をこぼしているであろう、彼女の、代わりに。

「あたしはね、あたしなりに、あの人のことを、愛してたよ、思ってたけどね...。」

彼女は不意に、私のほうに向き直り、自分の昔話を、こう、閉じた。

「違ったかもしれないし、もう、今では、わかんないや...。」

ちょっと困ったような顔で、少し、首を傾げた。

江梨子を抱きしめたいと思った。

でも、そうしたら、いけない気もした。

今度は、江梨子が訊ねてきた。

「ふみは、まだ独身なの？ いい人とか、いないの？」

彼女もまた、私の左手を見ていた。

「結婚は、してたよ。」

過去形であることに、自分でも気づいた。

「えっ、あっ...！」

私にも何か事情があったのだと察した彼女は、言葉を詰まらせた。

「私の話も、聞きたい？」

数秒の間をおいて、

「聞きたい、かな...。」

と、江梨子は言った。

「私は、看護師になって横浜で病院勤めしてたんだけど。4、5年前から、親がお見合いしろってうさくてさ。」

彼女は、苦笑いを浮かべて、ああ、と何度か首を縦に振った。

「三十路前に嫁に出したかったんだろねー。とにかく、親のつてでお見合いして、医者と結婚し

たんだ。」

「おーっ、医者かぁ。」

明るい話では終わらないことは分かっていたが、彼女は少しばかり持ち上げてくれた。

「まあ、ちょっと、年が上だったけど。彼は、優秀な外科医だったと思うよ。」

「うん...。」

ミネラルウォーターで、一度、喉を潤し、私は、核心部を話す決心をした。

こんなとき、ちょっぴり酔えていたら、と、頭の隅で思っていた。

「2年前の、10月にね。彼は、アメリカで開催される学会へ出かけて...。」

江梨子は静かに頷いた。

「その時彼が乗っていた飛行機が、落っこちちゃった。それで、行方不明。」

「行方、不明。」

彼女は、呆然と繰り返した。

「そ。彼の物と断言できる遺体の一部も遺留品のひとつも、なーんにも、見つからないまま
でさ。」

「ふみ...。」

「去年、死んだことになって、葬儀が終わったら、実家に帰されちゃったんだ。」

私は、悲しい顔を、していたのだろうか。悲劇のヒロインさながらに。

「ふみは...。」

「まだ、若いんだから、きっと、いい人が見つかる、とか、もう一度、やり直せるよ、とか、月並みなセリフを何度も言い聞かせられたよ...。」

ああ、そんなに、悲しい顔をしないで。

「ふみは...彼のこと、愛してた？」

それは...、彼女にだけは、聞かletくなくった...。

私の口から怒涛のように持て余していた感情があふれ出す。

「江梨子は、殴られてもさ、旦那さんの事愛してたんだよね？ 私は...、愛してなんかいなかった。
。お似合いの夫婦とか言われながら、心の底では違和感ばかり感じてた！ だって、本当は私は
、今でも！」

彼女は、私の両肩を掴んだ。

「江梨子が...。」

彼女の目を真っ直ぐに見ることはできなかつた。

彼女は、ゆっくり、首を横に振った。

「江梨子の...、ことが...っ！」

私が禁断のコトバを吐き出す前に、彼女はもう一度、強く、左右に首を振った。

まるで、そのコトバを聞くまいと恐れているかのように。

「違うわ、ふみ。」

私は、おそろおそろ彼女の瞳を覗き込んだ。

メガネの奥の漆黒の瞳は、しっとりと濡れている。

「ふみが、愛しているのは、あの頃の、思い出、じゃないの？」

「そ、んな...。」

「あの頃のあたしたちは、幸せだった。ねえ？ ふみ？」

「うん、幸せ、だった...。」

「...あたしたちって、付き合っていたよね？」

「うん...。」

私は、消え入りそうな声で呟いた。

「でも、それはもう、思い出のひとつなの。」

思い出...。その中でだけ、生きていけたら、いいのに...。

「だから、もう二度と、戻れないと、思うの。」

「どうして...？」

江梨子は、今にも涙がこぼれ落ちそうな、悲しげな表情を見せた。

「ふみだって...、本当は、分かってるでしょう？」

分からない...。

「ねえ。...あの頃の、私たち、間違ってたのかな？」

「ううん。...そうね、ひとつだけ、間違っていた事が、あるとすれば。...ちゃんとさよならを言えなかった事...じゃない？」

私はようやく、彼女の想いの全てが理解できた気がした。

くすぶり続けていた想いは、今、全てが思い出となった。

私たちの思い出は、遥か遠くで輝いていて、どんなに手を伸ばそうとしても、到底届きそうになかった。

美しすぎる、星のように。

最初で最後のキスは、少し、しょっぱかった。

「今度こそ、さよなら。」

「さよなら、江梨子。」

バス停に向かう背中をいつまでも見送りながら、彼女の幸せを、そっと、願った。

それから、あの、青いベンチに、彼女の姿を見ることはなかった。

今回のテーマは強いて言えば、「思い出」かな？

vol.3では、「青いベンチ」という曲の歌詞を基にして、イメージを膨らませてお話を作ってみました。

シリアスで終わって見たかったけど、難産だったわりに、うーむ？という結果に...^^；

生涯習作です。こんなもんです。

何か感じてくださった方はコメントいただければとてもうれしいです！

おにゃのこのカケラ vol.3 「青いベンチ」

<http://p.booklog.jp/book/33827>

著者：ゆきの

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukino0705/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33827>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33827>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.